



創立70周年「つづく つながる 夢を育てる学び舎」 令和3年(2021年)7月19日

国立二小だより

国立市立国立第二小学校

校長 小林 理人

## 心に刻もう 未来につなごう

校長 小林 理人

校長室の入り口にある掲示板には、東京2020オリンピック開幕までの日数(4)が表示されています。予定されていた聖火リレーやラグビーの学校観戦ができなくなり、「コロナ禍でもできることを考えよう」と子供たちに投げかけた日からカウントダウンを始めました。

すると、すぐに2人の4年生が校長室に来て「ラグビーのボールに寄せ書きをする。」「選手へのメッセージを動画で伝える。」と学級で話し合ったアイデアを知らせてくれました。

オリンピックやパラリンピックに出場する選手とのつながりを実感したり、選手を応援する気持ちを伝えたりすることを可能にするすばらしいアイデアで、その日の職員会議でも紹介しました。

また、東京都教育委員会からは東京都の小中学生に対して「アスリートにメッセージを贈ろう」という取組の紹介もありました。未来を担う子供たちが、主体的にオリンピックに関わることができるよう、マスコミやスポーツ関係団体などが中心となり、コロナ禍でもできる関わり方が様々に紹介されています。開催間近になり、オリンピックやその関わり方への関心が高まっているようです。

### 何がレガシー(legacy)となるか

オリンピックではレガシー(legacy)を大切にしています。レガシーとは「遺産」のことで、オリンピックを通して残るものを意味しています。国際的なスポーツの祭典であるオリンピックを開催することで残るものは様々です。建物や施設だけではなく心の中に残るものも大切なレガシーのひとつです。もちろん良い事ばかりではありません。コロナ禍で予定、計画していることが次々とできなくなる中、私たちの心に残るものは何なのでしょう。

私はこれまで何度か日本で開催されたオリンピックを経験しました。中でも札幌で開催された冬季オリンピック(1972年)のことは鮮明に覚えています。特に記憶に残っているのはジャンプ競技で3人の日本人がメダルを独占したことです。テレビを食い入るように見ていたことや、その時の胸の高鳴りは今でも忘れられません。

長野オリンピック(1998年)の時は6年生の担任でした。金メダルを獲得したジャンプ団体戦の決勝の日は、教室のテレビに向かって子供たちと一緒に大声援を送ったことは忘れられない思い出になっています。日本で開催したオリンピックで、世界の強豪たちと堂々と競い合う日本人選手からは「やればできる」という希望と勇気をもらいました。

皆様にとってのオリンピック・パラリンピックのレガシーはどんなことでしょうか。

先日、学年主任が集まり、オリンピック観戦に替わる学校の取組について話し合いをしました。オリンピックやパラリンピックと子供たちがどのように関わることができるか意見交換をしました。

そして、「19日(月)の全校朝会時に聖火リレーに替わって行われたセレモニーの様子を撮影した動画子供たちと一緒に見て、その後、クラス毎にオリンピックやパラリンピックについて話し合ったり、担任の思いを伝えたりしよう」という意見にまとまりました。

コロナ禍の1学期も無事終業式を迎えます。子供たちや学校を支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。そして、21日(水)からは緊急事態宣言下の夏休みが始まります。二松クラブや夏季プールなどこれまで学校で行われていた取組や、盆踊りや夏祭りなどの地域のイベントが今年もできません。家族旅行や帰省なども制限され、自宅でご家族と過ごす時間が多くなりそうです。そんな夏休みだからこそ、ご家族でオリンピック・パラリンピックを楽しみ、感じたことを伝え合ったり、感動を共有したりすることができます。そして、それが心に刻まれ、子供たちの生き方や未来の社会につながるレガシーとなるのかもしれない。オリンピック・パラリンピックを通してみんなの心がつながり、コロナ禍の先にある未来に向けて希望の光が差すことを祈っています。